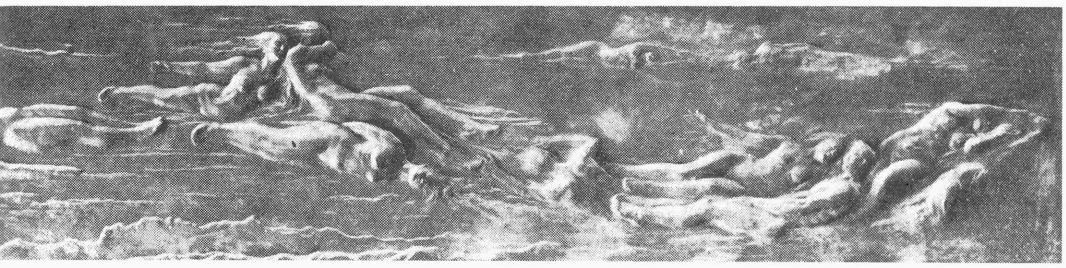
ISSN 0582—4478

京都大学附属図書館報



静脩

1997年3月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 33, No. 2

倫理学者にもわかる工学書を

京都大学文学研究科教授　加　藤　尚　武

阪神大震災が起こったとき、私は翌日には新聞社に災害対策の問題点を指摘した文章を送った。すると今度は雑誌社から災害対策論を至急書いて欲しいという依頼がきた。平成3年から経済企画庁の「安全問題の総合的な対策」というような内容の審議会の委員をしていたので、日本の災害対策については、ひととおりの知識は持っていたが、地震や建築の安全性については、最新の情報をチェックしておく必要があった。

大学の附属図書館に駆け込んだのだが、(今は一新されているが) その時には、地震や安全問題については十年も古いような本しか置いていなかった。

図書館の機能はたくさんある。デイトの待ち合わせ場所にする人もいる。私が期待するのは、専門外の知識の入手先という意味での図書館の機能である。倫理学の仕事では、生命倫理学の関連で、肝臓の障害について調べるとか、環境倫理学の関連で、大気圏の観測方法について調べるとか、調べなくてはならない領域が限りなく広い。

最新で最高の知識が即座に分かるための図書館というのは、「ないものねだり」に近いかもしれない。どの専門領域でも、最新の知識はとても難しく思われる。何年もかかって、多くの人が紹介や論評を重ねて、だんだん分かりやすさが作られてくる。

ダーウィンの「進化論」のように、はじめは分かりやすい理論だと思われていたのが、だんだんその難しさが分かってくるという例もあるが、その難しさが分かるということも、分かりやすさなのである。

大学の図書館では、どうしても専門書として水準の高いものを揃えたいという要求があるだ

ろうが、倫理学者でもわかる「原子力発電論」とか、逆に病理学者にもわかる倫理学書とか、専門領域をクロスした知識の需要があることを忘れて貰いたくない。素人向けの通俗の解説書で質の良いものを漏らさず揃えて欲しい。

大学とは本来、専門の領域にまたがる知識を作り出す可能性をもつものでなくてはならない。それなのに実際は、専門の壁、文科系と理科系の壁がどんどん厚くなってゆく。人間にとってもっとも重要な意思決定は、そのような壁にまたがるものなのである。人間が必要な意思決定の能力を失う危険が増大している。学問のあり方そのものを変えてゆく必要があるが、その土台となるものは、図書館という情報の集積体だろう。

（平成９年１月31日）

PsycLIT（心理学行動科学文献情報）のネットワーク利用について

総合人間学部参考調査掛長　沼　澤　　博

１．はじめに

このたび、PsycLIT を学内３部局（文学部、総合人間学部、教育学部）で分担購入し、附属図書館の CD-ROM サーバ機により、吉田地区でネットワーク利用できるようになった。検索利用できるようになったのは、１月７日からである。

２．スタンドアローンのころ

PsycLIT は、Psychological Abstracts の CD-ROM 版である。心理学関係の雑誌論文等を検索するデータベースで、1974年以降のデータが検索でき、年４回更新される。各データには抄録がついていて、簡単な内容を知ることもできる。この CD-ROM を総合人間学部図書館では、平成７年の夏からスタンドアローン形式で提供してきた。通常の経費とは別に学部創設にかかる予算が配当された折り、「これからは研究者も学生も雑誌論文をもっと利用しなければならない、冊子体目録で検索しているようではいけない」と強く主張してくださる先生があって、講座予算で購入し図書館へ提供されたのである。その時、PsycLIT の他に社会学関係の Sociofile、文学・語学関係の MLA International Bibliography も購入していただき、提供してきた。

３つのデータベースのうちで群を抜いて利用の多かったのが、PsycLIT であった。教育学部の院生・学生の利用が多く、聞けば利用した人から人へのヒューマン・ネットワークで広まった様子。最初に使ってその便利さを知った誰かが、そのよさを宣伝したらしい。いろいろと張り紙をして利用促進を図ったけれど、張り紙よりも実際に経験した人の一言の方が遙かに効果があったということだろう。

「これまでどうやって論文を探していたの？」
「教育学部にある冊子体の『Psychological Abstracts』です」
「CD-ROM と比べて、どう？」
「あんなの、もう、使えませんよ」
そのような会話を幾度となく繰り返した。

しかし、PsycLIT の年間使用料は50万円を超える。特別予算のつかない翌年度以降の契約を講座に期待することはできないし、図書館の予算から拠出するのも無理な話であった。とはいえ、せっかく提供してきたサービスを中止するのは、図書館としても辛いことである。

だから、昨年の春ごろからは、
「もうすぐ PsycLIT は使えなくなるからね」
「そんなの、困ります。なんとかしてください」
「そう、困る。だから、その困るっていうのを、ここじゃなくて、教育学部の図書室とか、指導の先生にいってよ。そうしたら、なんとかなるかもしれない」
というような会話にかわった。

教育学部の図書掛長と顔を合わせると、教育学部の院生・学生の PsycLIT 利用がいかに多いかという話をし、なんとか購入に協力してくれるようにという話をしたが、協力したいのだが、図書予算が少ないので無理ですよ、という返事であった。

だから、正直いってなんとかなると思ってい